

## 憲法と映画(108)『富士山と、コーヒーと、しあわせの数式』

(監督 中西健二)

<かな>



先日娘のところに孫守に行きました。たまたま遊びに来ていた自転車ヒルクライマー(自転車で山道を走る競技)の女性に出会いました。30歳になるという彼女は、落車して怪我でもしようものなら競技人生にピリオドを打たなければならないかもしれないのに、夢を追い求めてすべてを投げ打ってこの競技に懸けているとのことです。一方、古希を過ぎた私はといえば「あと何年生きられるか」なんて人生を逆算し始めている情けないありさまです。

そんな時に観た映画が、『富士山と、コーヒーと、しあわせの数式』でした。主人公の文子は私と同年代で夫に先立たれて一軒家に一人暮らしをしています。シングルマザーの一人娘はバリバリのキャリアウーマンで、長期のアメリカ出張が入ったものの母が心配で、大学生の息子・拓磨にしばらくの間おばあちゃんと同居するよう言い残してアメリカへと向かいます。拓磨がたまたま入った亡き祖父の書斎には、文子から「おじいちゃんは、富士山が大好きだったのよ」と聞かされたとおり「富士山」の絵や写真が所狭しと飾ってありました。そこで偶然手帳に挟んである文子宛ての大学の入学案内書を見つけます。中学しか出でていない彼女は、亡くなった夫の計らいに戸惑いますが、「勉強したい」という思いが勝って意を決して聴講生として大学に通い始めるのです。聴講生仲間とも親しくなり勉強が楽しくて仕方がありません。一方、同じ大学に通っている拓磨はやりたい職業すら見つかっていません。バイト先で覚えたコーヒーの淹れ方にはこだわりがあり、お客様が笑顔で飲んでもらうことに喜びを感じています。文子は孫に、「そんなにコーヒーが好きならそれを仕事にしてみたら」とそっと背中を押してくれます。

一方、文子と娘の関係は、いつもギクシャクしていて面と向かうと思いやりやいたわりの言葉よりも相手のあら探しで口論になってしまいます。生前、夫から「ちゃんと話し合ってみたら」と諭されますがどうもうまくいきません。手帳には祖父が生前に書いた「八／5=2305」とだけ書かれたメモが残されていました。孫の拓磨が、問題のからくりを解くことでそれぞれの人間関係や進路が明確になってゆきます。映画のキャッチコピーは「一歩踏み出してみると、人生って意外と楽しい」です。私も人生を逆算している場合ではないことに気づきました。自転車競技に人生を掛ける彼女のように私も夢に向かって小さな一歩を踏み出したくなりました。